

黛先生を送る

小倉芳彦

神田川——といっても南こうせつの「神田川」ではない。学習院前の目白通りを東へ椿山荘方面に向かい、日本女子大学前を過ぎて、道が少し右にカーブする突当りに位置する鰻屋である。今を去る四十年前の一九六〇年秋のある日、私はこの鰻屋の二階に集まるよう指示を受けた。その後改築されていくらか様子が変わっているが、場所は当時から動いていない。

六人ほど集まったこの日の会合が、翌年四月から開設予定の史学科スタッフ顔合せの会であることは、その席で児玉幸多先生から正式に披露された。文学部に史学科を新設する計画は、麻生磯次学部長の意向を中心に六〇年度に具体化し、九月に入ってメンバーも確定していたのである。

学科主任は日本近世史の児玉先生。旧制七高教授から学習院に迎えられ、中等科長、女子短大主事、一般教育主事などを歴任し、その時は政経学部に属しておられた。東洋史は朝鮮史の泰斗末松保和先生。敗戦後朝鮮からの引揚げで辛酸を嘗められたが、安倍能成院長の知遇により学習院の図書館長に迎えられ、東洋文化研究所主事

として『李朝実録』の復刻に精力を注いでおられた。

この重鎮の教授お二人以外に、学習院内から助教教授候補が求められた。一人は西洋史の金沢誠先生。高等科に籍はあったが、大学助教授を兼ね、フランス革命を講ずれば、その洒脱な話術と華麗な文章によって、学内外の評判を擅にしていた。もう一人高等科には、金沢先生より十歳若い小倉芳彦という東洋史担当の教員がいて、文学部哲学科の「中国思想史」の講義を手伝っていた。

全く学外からこの席に見えたのが黛弘道・清永昭次のお二人である。黛さんは東大国史学科を卒業後、大学院に進学したが、在学中からすでに、後年『律令国家成立史の研究』の著書に結実する日本古代史関係の名論文を発表し、五八年からは教養学部の助手になっておられた。こちらは気づかなかったが、私が駒場での研究会に出かけた折に廊下ですれ違ふこともあったらしい。ギリシア史専攻の清永さんの方は当時まだ東大大学院に在籍中で、お目にかかったのは全く初めてだった。清永さんだけは一年遅れて史学科開設二年目の六二年からスタッフに加わっている。

当初は入学定員三〇人で出発した史学科は、教員・学生ともども新興の意気に燃え、また家族的な雰囲気溢れて、研修旅行やコンパを楽しんだ。学生が専門課程に進む三年目には、日本中世史の大家安田元久教授が北海道大学から着任して、史学科は一層重厚・多彩さを加えた。

黛さんと安田さんは、かつて東大国史学科の学生・助手の関係だったが、本学史学科の同僚となってから拝見したところでは、お二人はいろいろな点で対照的だった。身だしなみからしてダンディで、学生時代バスケットの名選手だった安田さんは、マージャン、ビリヤード、その他もろもろにかけて達人で、夜な夜な梯子でバーを飲み歩く習性を、脳出血で倒れる晩年まで変えなかった。一方黛さんは服装は至って地味で、スーツ以外着たのを見たことがなく、I書店発行の便利な手帳も色が派手だからと使用せず、お酒はじっくり呑みあかす方だった。

私はよく冗談半分に、「人は研究分野を扱ひ、扱んだ研究は人に影響する」と言ったりしたが、中世の荘園や武士団を専門とする安田さんの人柄は、どこことなく新編追加武士法の世界を思わせ、古代の官制を専門とする黛さんの発想は、律令的な枠組の厳格さを見えているように思えた。身近な人事の適・不適を噂したりする場合にも、黛さんは「官の為^{官のため}に人を求め、人の為^{人のため}に官を求めず」と、十七条憲法の一節を口にして批判を漏らすこともあった。

古代の官職や血縁関係に関する黛さんの博覧強記は万人の知るどころ。『律令国家成立史の研究』（一九八二年）はその結晶であり、

それによって東京大学から文学博士の称号を受けられた。しかし黛さんは決して学究一辺倒の窮屈な学者ではなく、学術的研究と平行して、『古代史を彩る女人像』（一九八五年）のような比較的啓蒙色の濃い、しかし緻密で懇切な文章も多く書かれている。歴史を愛好する社会人グループ——例えば旧府立第三高女卒業のご婦人方の玉石会——に対し、終始変らぬ指導を続けておられるのもその一面である。

「お風呂は肩まで沈めず、乳までがいい」と、入浴方法にまで気を配っておられた黛さんだったが、国内研修中の一九八八年一月に脳出血で倒れられた。リハビリを経て二年後に復職、歩行困難をおして、ご子息の運転するクルマで毎週定期的に出講、演習を中心に十年間にわたり史学科学生を指導された。その間、ご自身の論文執筆にも気力を持続されたのは敬服に堪えない。

このたび選択停年制により七十歳より一年早い退職の決意をされた。惜しみて余りあるが、やむを得まい。やがて設立四十年を迎える史学科の当初からの仲間として、ここに思いつくことの一端を述べ、先生の今後一層のご精進をお祈りする言葉に代えたい。